THE SANKEI SHIMBUN

企業防災3Kは「訓練・価値観・風通し」東京で事故災害遺族らシンポ　命最優先の対応訴え

2026/10/31 19:21

長谷川 毬子　防災



シンポジウムで講演をする田村孝行さん（左）と妻の弘美さん＝10月31日午後、東京都千代田区（長谷川毬子撮影）

企業防災などの観点から命の大切さを伝える一般社団法人「健太いのちの教室」は31日、専修大神田キャンパス（東京都千代田区）で、安全な社会づくりを目指すシンポジウムを開いた。代表理事の田村孝行さんは「悲惨な出来事を点から線へと結んで二度と起こさないための社会の仕組みを作る」と強く訴えた。

孝行さんの長男で七十七銀行女川支店（宮城県女川町）の行員だった健太さん＝当時（25）＝は平成23年の東日本大震災で、支店長の指示で支店屋上にとどまり津波の犠牲となった。孝行さんは「なぜ目の前に高台があったのに逃げることができなかったのか今も疑問は消えない」とし、「有事の際は指示命令という壁を壊して避難させることが企業の責任。誰もが意見を言って尊重し合える風土が必要だ」と語った。

シンポジウムには、27年に広告大手電通で働いていた娘の高橋まつりさん＝同（24）＝を過労自殺で失った母、幸美さんや、18年のエレベーター事故で都立高2年だった息子の市川大輔さん＝同（16）＝を亡くした母、正子さんら遺族も参加。幸美さんは「それぞれ形は異なるが根底にある問題は、組織管理下において守られるべき命が守られなかったこと。これからも皆さんと命を大切にする社会の実現のため手を携えていきたい」と話した。

被災者支援に詳しい弁護士の永野海氏は組織防災に不可欠な3Kとして「訓練・価値観（組織風土）・風通し」を挙げ、「避難マニュアルを組織の皆で作って周知し、訓練を続けることで組織の風土を変えていくことができる」と話した。（長谷川毬子）

©2020-2026 The Sankei Shimbun. All rights reserved.